（Ⅱ）

九谷　六口

北風が　ピューと吹いてる　野の小径
貴方想えば
熱き体に

涙して　一人夜空を　見上げれば
笑ってごらんと
月がささやく

風の中　羽膨らませ　雀たち
寄り添い並ぶ
冬の軒下

ただ静か　行き交う人を　幾時代
お地蔵さんは
眺め見守る

さえずりに　ふと目を遣った　椿花
鶯色の
目白花咲く

独＝[犭(ケモノ)]＋[虫]

独身(ひとりみ)は　ケモノムシとは　良く言った
契り結んで
晴れて人間

行く末を　案じたところで　何になる
明日は明日の
風が吹くのに

人恋し　庭の椿の　その紅に
つがいのメジロ
嬉々と戯れ

金もなし　タップリあるのは　時間だけ
これが売れれば
巨万の富に

唇を　初めて重ねたその時は
総てが消えて
ただ鼓動だけ

秋夜長　月を眺めて　君想う
猪口に一粒
呑む涙酒

侘助の　緑に映える　その白さ
己が人生
かく在りたきと

凛とした　小さき花の　侘助が
人の生き様
示すが如く

天の川　年に一度の　逢瀬なの
波よ静かに
渡る笹舟

空を見る　時の流れを　しみじみと
ああ短きか
人の生命の